

Title	(随想)アグリジェントの億出
Author(s)	黒田, 一秀
Citation	泌尿器科紀要 (1963), 9(2): 57-58
Issue Date	1963-02
URL	http://hdl.handle.net/2433/112410
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

泌 尿 器 科 紀 要

第 9 卷 第 2 号

昭和 38 年 2 月

随 想

アグリジエントの憶出

北海道大学助教授 黒 田 一 秀

1960年ローマオリンピック耐々の頃人々を避けて私は前後1週間のシチリアの旅を試みた。ローマ大学の恩師ミンガチーニ教授は8月は暑いから大変だと云つて下すつたが、酷暑の南イタリアも興味があると出かけたのだつた。只シラクーサに着いた晩は40度近かつたらしく、宿の予約もせずに行つた私は写真機と着替だけでも結構重たいスーツケースを持つて泊るところを探し歩いた時は、全く汗みずくになつた。あとで新聞を読むとベルギーのサイクリング選手が日射病で死んだと云う日であつたから、イタリア中が特別暑かつたらしい。

首都パレルモから、九州より一廻り小さいこの島を縦断して、南岸の町アグリジエントに着いたのは、そんな夏の矢張り宵であつた。途中の車窓から、黄色く枯れた草と岩肌の丘に時々オリーブの樹がポツリと立っていたり、飲料水は何うするのかと心配になるような山の頂や中腹に、堅固な石壁を巡らした部落を遠くに見たりして、窓をあけても寒くも何ともない穏やかな日暮を、汽車は丘の下にたどりつく。高い所に目指すアグリジエントの街の灯が明滅していた。空は澄んで薄明るく、星の光も何となく南の国らしい。列車は前進後退を繰返して坂の町の直下についた。正面がホームより3階も上にある山の上の町だ。Belvedere見晴荘との名にひかれて決めた宿はこれ又とても高い所にあつた。狭い石段を昇つてたどりつきチェックインすると、番頭は日本人が時々来る、皆柔道が強いと云う。日本の船が南の海でマグロを漁っていることはかねて聞いていた。その船員さんや漁師たちであろう。部屋に入ると大急ぎでシャツを洗濯してブラ下げ、シャワーを浴びて着替え、外へ夕食に出かける。9時頃の坂下の公園には賑やかな色電気が灯り、人々が樹蔭のテーブルで団欒している。屋台もある。ミーナかモドゥーニヌか知らないがレコードが絶叫している。お巡りさんが旨いと教えて呉れたトラットリアでチラチラするテレビを見、ゆつくりとスパゲッティを食べながらあしたの見物の事を考えたのだつた。石舗と狭い階段の道、漆喰と石の家々は中世のものであろう。然しこの町に来た目的は、前6～5世紀アクラガスと呼ばれて始まつたこの町の傍に今も立つ凝灰岩のギリシヤ神殿が見たかつたからだ。前年9月学会の折、ベストウムのポセイダンの神殿を見てからは是非と思つて計画していたのだつた。8mmも持つて来たし、明日は撮りまくつてやろうと宿の主人にバスの乗り方などきいて私はわくわくして寝に就いた。

翌朝バスに乗つて隣の尾根にある古代の街へと向つた。アクラガス、ギリシヤ詩人ピンダロスによつて地上で最も美しい国の一つとうたわれた且つての町の神殿は現在の町からゆるい斜面を降りて、一寸高くなつた、南に地中海の見える海拔300m位の丘の上に立ち並んで

いる。土台と柱だけのものや、屋層は落ちているが前後の破風は保存されているのなど、孔の多い凝灰岩のドリア式神殿が5つばかり人気のない高みに静かに肅然として二千数百年を経て立っていた。振り返ると北には今の町が向うの丘に横たわり、周りの谷にはオリーブアマンドラの樹が茂り、軽い風が戯まれる。海が近いからである。朝の光のなかに並ぶ街の輪廓や谷の樹々の葉が、遠いのの一つ一つ手に取るようにハッキリ見え、列柱の神殿と澄んだ空気とは実に自由で気持がよかつた。8mmを持つて破風の下から見上げたり、アップからティルトダウンしたり、柱の石の質感を接写したり、青い空をバックに全体を浮き上がらせたり、丘の斜面に長く落ちる柱と自分の影を一緒に写し込んだり、セルフタイマーを使つたり、夢中になつて撮つた。

石、水、町、樹、林、神殿、空、この明るさ、透明さ、造形性、そう云うものがイタリアの精神を培つた。ギリシア、ローマ、中世、ルネサンスの文化、近代科学の萃もこの風土から生れた。そして今も変りなく存続して訪れる者の心を捉える。連綿として生きている目に見えないものがそこに在つて私に迫り心が躍るのを覚えた。それは今でも何かスバラシさの感と呼び覚まし希望や勇気を与えてくれるのだつた。ローマ大学の某教授が日本医学の源流は何処にあるのかと問われた時、日本古来の伝統は断絶している、明治以降西洋に学んでいるのだから同じくヒポクラテスだろうと答えて、我々の無関心に気付き、この国の学徒達は今もヘラスの精神的伝統を学び、キリスト教の信仰のなかに生きて、たとえなかにはそれに反逆するものがあつても、本筋の意識を持つて勉強していることを思つた。我々はどうであろう、医学は自然科学で何のしきたりも慣習も歴史もいらぬ、論理の綱をたぐつて行けば立派な答が自ら出て来る、旧いものは措いて新らしく進んで行けばいい、そして科学から離れては不確で無意味なことしか得られないと考え過ぎはしないか。だが然しそんな古くさい伝統に何の意味があるのか。それを棄てたからこそ此処まで来たのではないか。そうだ、だが今来るところまで来て危機に立っているのではないか。現代日本の医療の諸問題は医者勉強を科学技術の習得とだけ考えたり、教育投資と云う言葉にあらわれるように、医術さえもまつたくの経済問題に還元してしまうことから来てるのではないか。医学ことに臨床は人間に対する行為である以上単なる自然科学であつてはならない筈である。保険診療にまつわる矛盾は医者の仕事を単なる技術と考えるか、それどころか同じ種類の治療を誰がやつても全く同一の価値しか持たないマスプロの商品並に扱つて、不当な割引さえ押付けている現状から当然生れて来ることではないか。若しこの儘なら医療は減びる。医者商売が経済的にさえ成立たないとなれば利口な人間は医学校に入らないだろう。まして崇高な医の蘊奥を極め人間の生命の進展に参加しようなんて考える人がいなくなつてしまう。日本医学の精神風土は荒れかけている。ここで静かに根本から考え直さねば……然しこの風景は何と明確で爽やかな……そんなことを考えながら独り有頂天になつていたのだつた。

さて悦に入つて撮つた8mmはローマに帰つて現像映写して見たら、次のシラクーサのと二重どりになつて何ともわけの分らないシュールレアリズム調に出来上つていた。我が愚かさをしばし嘆いた次第である。だがあの時心に浮んだことは矢張りほんとうであり省みるべきことではないだろうか。